

層から出た土器が接合している。したがって、10・11号住居はほぼ同時で、13号（そして当然12号）よりも古いと判然できる。

9号住居は、床面に剥片が放置されているし、小判形の平面形で大形であることも13号住居とよく似ている。しかし、この住居は周囲に土壙が切り込んでおり、輪郭がひどくくずれている。この住居と土器・石器がほかの住居と接合しない14号住居とは、6棟の住居のうち、いちばん古いものと考えてよかろう。そうすると、9・(14?)→10・11→12・13と2棟の住居が一対となって3期にわたって変遷をつづけていることになる（注2）。

もちろん、林謙作氏がいうように「この推定にまったく問題がないわけではない。なお今後吟味を重ねる余地もあるが」（注2），参考とすべき見解と思う。

事実、今次調査地点内で第I群土器の出土はわずか5点であり、竪穴住居跡の片鱗が出ているわけでもない。にもかかわらず、次の調査箇所の重点とするに足るものと考える。第7章の考察（55頁）についての感想もある。

2 第II群土器（鵜ヶ島台式）について

大野平第II群土器は、「関東地方の鵜ヶ島台式に並行する」（本書65頁）。

最上川流域でのこの土器の初見は、村山市土生田遺跡においてである。以後、数カ所の遺跡で検出されている（注3）。

大野平でこれまで見られた早期縄文土器のうちで、この土器は標式となった神奈川県鵜ヶ島台貝塚の土器にかなり類似する。つまり、もっとも広域に分布する縄文土器の一つであると考えられるのである（注4）。

—ここに、野島式、鵜ヶ島台式、茅山下層式、茅山上層式とよんだ各型式の土器は、従来「茅山式」の名で総称されてきたものである。……（中略）、これらの土器の文様の消長は、相互のあいだに大きな飛躍もみられず、ほぼ漸移的に変遷したものと理解できる。しかし、器形のうえには、野島式と鵜ヶ島台式のあいだにいちじるしい間隙があり、あきらかに一線がひかれる。つまり、尖底深鉢形をほとんど唯一の器形とする野島式に対して、鵜ヶ島台式には、あらたに段（屈曲）とくびれがみとめられ、さらに平底が一般化する。段の出現と平底の普遍化は、おそらく土器製作上において必然的な関連をもっていたのであろう。したがって、もし「尖底を有する本格的に古い土器群」を早期とするならば、鵜ヶ島台式以降の土器はそれからのぞかれることになる。…（中略）…。

条痕文土器群のうち、野島式、鵜ヶ島台式、茅山下層式の各土器は、斉一性のつよい型式であり、それ以前の段階にみられた地域差を止揚しながら、近畿地方から東北地方南半におよぶひろい地域に、その分布圏を拡大した。このような広大な地域にわたる分布圏の拡大は、ひとつには遺跡の増

大があり、ひとつにはつよい浸透力にさえられてこそ可能であったと考えられる。

……（中略）……。

また、かぎられた地域での現象からいうと、遺跡立地の面に大きな変化のあったことがうかがわれる。野島式以前の土器をだす遺跡のはほとんどは丘陵の頂部や舌状台地の先端などのごくせまい、いわば局限された場所に立地している。いま、このようなありかたを早期的な立地とよぼう。野島式から茅山上層式にいたる各型式の土器をだす遺跡には、このような早期的な立地をしめるものもあるが、一方よりひろい平坦な台地——そこは、しばしば前期の時期のより大きな集落をいとなむために選定された場所であり、かりに前期的な立地とよんでおこう——に存在する例もかなり多い。つまり、いわゆる茅山式土器の時期における集落立地は、一方で早期的な立地を踏襲しながら、また他方でそれをこえた新しい地形的位置——前期的立地を選定しようとする傾向をしめしている。この傾向は、早期的なものを克服するなんらかの発展の力を暗示しており、具体的には森林伐採技術の高揚、集落規模の拡大などを想像させるものである。

このような発展は、なにによって裏づけられていたのであろうか。…（後略）…（注4）。

ここ大野平を単に「早期的な立地」の遺跡と片づけるか、「前期的な立地」をもあわせもったと理解するか。その展開の裏づけをより具体的に探らねばならない。

3 繩文・条痕文土器と住居跡について

この時期の竪穴住居跡を確実にとらえたものとして、今次調査は大きな意味をもつ。しかも、石組の屋内炉をもつことである。

最上川流域で石組の屋内炉が一般化するのは、例えば長井市宮遺跡の例のように大木7b式期ころからあるとされてきた。しかし、集落内の同時期の竪穴住居につねに同じように炉があつたりなかつたりと歩調をとるわけではない。先に紹介した函館市中野A遺跡のばあいを再びみてみよう（注1）。

——さきに復原した住居の流れのなかでは、たえず大小の住居が一対になっている。また、屋内に焚火の痕跡をとどめるものとそうでないもの、間口・奥行がほぼ等しいもの（プランは円形か方形）と間口に比べて奥行のふかいもの（プランは小判形）の区分もある。これらの区分が何を意味するのか、はっきり理解されているわけではない。しかし、これらの区分が集落を構成する原理と何らかの形でかかわりをもっていることは確かであろう（注2）。

大野平の4号住居はどうやら隅丸方形を呈すると思われる。すべてを中野A遺跡との対比で片付けようとは思わないが、予想しておくべき課題と考える。つまり、これまで大野平遺跡で発掘され